
のろのろまこちゃん

七瀬なな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のろのろまこちゃん

【Nコード】

N0615D

【作者名】

七瀬なな

【あらすじ】

保育園へ通う、のんびりやさん「まこちゃん」のお話です。

まこちゃんは、あしか幼稚園の年長さんです。

本当は野々宮まこ、という名前なのですが、みんなは、まこちゃんを「のろのろまこちゃん」と呼んでいます。

年長組のおともだちは、まこちゃん本人の前で堂々と、ふざけてつついたりしながら。

そして保母さんたちは、保母さんたちだけの会話の中で、こそこそと。

保母さんたちは、まこちゃんの動作がのろいのを、ひそかに心配していたのです。

もしかして体がおつむに、軽い欠陥でもあるのではないかと。

どうしてまこちゃんが、こう呼ばれるようになったかというと、ふだんから1テンポも2テンポも、他の子より動作が遅れるのも、もちろんですが、まこちゃんは本当にのろい、という事実を、きっぱり裏づける出来事が、毎日のように繰り返されるためなのです。

あしか保育園の年長組は、お家に帰るとき、だれが一番はやく門まで着くかを、お天気のよい日は必ず、競争していました。

一番の子から順番に、門をくぐって帰れることになっていたのです。

「よーい、どん！」

ぱん、と保母さんが手をたたくと、どの子も一番になりたくて、キヤーキヤーと歓声をあげて、押し合いへし合いしながら、げた箱へ突進します。

ある子は前に行く子のスモックをひっぱったり、保母さんの目が

とどかないところで、邪魔者をつきとばしたり、ひっぱたいたりもしていたのです。

保母さんたちは元気のよい子供たちの姿を、満足そうに見守っていました。

ところが、まこちゃんだけは、どういうわけか競争に参加しようとしません。

おともだちのみんなが、なだれをうって表にとび出していった後、まこちゃんはおもむろにカバンをとりあげ、帽子を深くかぶり、げた箱のスノコに座って、おともだちが巻き起こした土けむりを、手でばたばた払いながら靴をはきます。

おともだちのみんなが、靴をちゃんとはかず、かかとをふんで、つかけたまま列に並び、並んだあとで改めて靴をはきなおすのに、まこちゃんは、きちんと靴をはくまで歩きだそうとしません。

だから、一番や二番や、真ん中あたりや、ビリから二番目なんかは毎回顔ぶれがちがうのですが、ビリは決まって、まこちゃんなのです。

おともだちは、まこちゃんを指差して笑い、保母さんたちは悲しげに首を振ります。

しばらくはずっと、こんな調子でした。

最初、笑い転げていたおともだちは、そのうち笑わなくなりました。

みんな、まこちゃんに待たされるのに、だんだんウンザリしはじめたからです。

「のろのろの、まこー！」

こっちはやしたてながら、まこちゃんを小突くおともだちの数も、小突く強さも、その回数も、日増しにエスカレートしてゆきます。さすがにマイペースのまこちゃんも、考え込まずにはいられませんでした。

まこちゃんは、自分がのろいを知っていました。

けれどそれが悪いことだとは、ちっとも思っていなかったのです。……どうやら、そうではないらしい。

まこちゃん一人だけ、他の人と考え方がちがうと、みんなと同じに一番を勝ち取るためにがむしゃらにならないと、おともだちも保母さんたちも、戸惑ってしまうみたいです。

でも、まこちゃんは、自分がのろいを知っていました。

他のおともだちのように、後ろから突き飛ばされても、転ぶのを踏みとどまって、すばやく体勢を立て直し、突き飛ばした相手にヒジ鉄をくらわせるような芸当は、とてもできそうにありません。

それでも、みんなと一緒に一番を取りたがらないと、みんなは納得しません。

そこで、まこちゃんは、とりあえず一所懸命なフリだけでも、試みることになりました。

「よい、どん！」

保母さんの掛け声で、いつもどおりに、みんな大騒ぎで外に飛び出そうとします。

まこちゃんは、怪我をしないよう、一呼吸おいてから、あわてた風をよそおって、昨日までより乱暴にカバンをひつたくと、帽子も頭に乗せず、靴を地面に放り投げ、スノコには腰をおろさず、かかとを踏んで、急いで走る真似をしました。

本気で走ってはいないので、本当はちっとも苦しくないのですが、はあはあと荒い呼吸をわざと繰り返します。

お芝居は大成功です。

ビリはビリですが、みんなは、とくに保母さんたちは、まこちゃんがつと、やる気を出してくれたと、とても喜んでいました。

正直に言うと、まこちゃん自身は、カバンを乱暴に取り上げるのも、帽子を手に持ったまま、靴もきちんとはかないで走るのも、あんまり気持よくなかったのですが。

だって、カバンをあんな風に肩にかけると、反動でカバンが体に当たって痛いし、靴のかかとを踏んで走ったりするのは、今にも転んでしまいそうで、おっかないのですもの。

けれど、まこちゃんの本音はお構いなしに、みんなは嬉しそうです。まこちゃんが、嬉しそうなフリで、にっこりしながら、やれやれ…というため息をついたことに気づいた人はいませんでした。

こんなに大変な、不自然な努力を頑張っていたのに、まこちゃんの平和な日々は、長続きしませんでした。

フリがばれたわけではありません。

むしろ、そのフリが、あまりにも上手すぎたための悲劇と言えるでしょう。

一応、やる気だけは見せたものの、相変わらずまこちゃんはビリから抜け出せないのです。

一所懸命がんばっても、ビリのまこちゃん。

本当に、のろのろなんだ。

努力が認めてもらえたのは、最初のうちだけ。

成果があがらないと見るや、人々は失望を隠さなくなりました。

……おしばいが足りないのかもしれない。

まこちゃんは、こう考えました。

……よし、じゃあ明日から、ビリになったら、うんと悔しそうにしてみよう。本当に、ビリは嫌なんだって顔をするんだ。

やってみました。

逆効果でした。

子供たちを一列に並ばせたまま、保母さんたちが集まって、なにやら相談しています。

保母さんたちが、ちらちらと自分のほうに目を走らせながら、低い声で話し合っているのを、まこちゃんは見逃しませんでした。

「ねえ、みんな」

一人の保母さんが、子供たちをぐるりと見回しながら話しはじめました。

「いつもまこちゃんがビリなんて、かわいそうよね。だから今日はとくべつに、一番うしろの人から順に帰ることにしましょう!」

ええーっ、という不満の声が、おともだちの口からいつせいにあふれ出します。

まこちゃんは、おなかの中が、ぎゅっとしめつけられたような感じがして、息がつまりそうになりました。

その感じは、おともだちに押されて、転んでひざ小僧をすりむく痛さより、いやなものでした。

「はやく行けよ、のろのろまこ!」

ずっとはなれた所から、男の子が叫びます。一番か二番か、きつ

とフリでなく、真剣に一番になりたくて頑張った子なのでしょう。
まこちゃんは動けませんでした。そばにいた保母さんが、見かねて手をひいてくれるまで。

『どうして、ほうつておいてくれないのよおっ！』
まこちゃんは保母さんたちに腹を立てました。

あたしは、かわいそうなんかじゃなかった。
一番なんか、はじめからどうでもよかった。
ビリだって、前に並んでるおともだちより、ほんの少し待たされるだけで、二度とおうちに帰れないわけじゃないんだもん。

それより、スモックもカバンもぼうしもクツもきちんとして、ケガしないよう、転ばないよう、ゆっくり歩いて帰りたいだけなのに。

それさえあきらめて、みんなが安心できるように、みんなと同じように、一番になりたいようなフリまでしてみせたのに！

あたしは、かわいそうなんかじゃない。
かわいそうなのは、今日、一番になった子よ。
あの子の努力は、どうなるのよ！

自分が傷つくかもしれない、おともだちを傷つけてしまうかもしれない、そんな恐怖をかなぐり捨てて、一番をめざしてつき進んだ、あの子のことを考えると、申し訳なさで胸がいっぱいになる、まこちゃんでした。

まこちゃんはよく転ぶので、転んだ痛さは身にしみています。
だからこそ、他の子が転んだ痛さもわかるし、ましてや、自分が他の子たちに痛い思いをさせるなんて……。

『明日もあたしがビリになったら、また、一番になった子が損をするかもしれない』

背筋が急に冷たくなって、まこちゃんはず、ぶるぶると身ぶるいをしました。

『明日からはフリでなく、本気を出して、ビリにならないようにしなくっちゃ！』

「よい、どん！」

次の日のまこちゃんは、決心したとおり、頑張りました。結果は…ビリから四番め！

ビリから四番めです！

ビリじゃありません！

おおつ、というどよめきが、周りのおともだちや保育さんたちから湧き起ります。

拍手だって聞こえます。

まこちゃんは、泣き出しそうになりました。

みんなには、うれし涙に見えたみたいです。

けれど、まこちゃんの本当の気持は、ちがいました。

これから毎日、こんな思いをしなくてはならない。

みんなは喜んでくれているけれど、本当は、ちっとも

自分のしたいことではない。だのに、

みんなと同じことをして、

みんなと同じ反応をしなければ、自分を認めてもらえない。

だれも自分をわかってくれない。

これまでも、まこちゃんは保育園が好きでなかったのだけれど、ますます好きでなくなっていました。

さて、まこちゃんがあまり好きでない保育園の中でも、もっとも好きでない行事が、運動会です。

他の子との競争に熱心になれない上に、動作ののろいまこちゃんにとっては、針のむしろです。

ただ唯一、気楽なのは、帰りの競争のように保母さんのえこひいきがない点です。

頑張った子や、本当に足の速い子が損をすることはないのですから。

それでもやはり、大勢の前で六人ずつ一列に並ばされ、走らされるのは苦痛でした。

他の五人がとくにゴールインした後、まこちゃんはたった一人で観衆の視線を浴びて走ります。

その間じゅう、ずっと「自分はだれよりも走るのがおそい」という事実を、晴れの舞台上で証明しつづけなくてはならないのです。

「あーあ、かけっこ、いやだなあ」

もうすぐやって来る出番を待って、あらかじめ、ふり分けられたとおりに行儀よく並び、入場門の下でしゃがみこんでいる、まこちゃんたち年長さんのグループ。

まこちゃんの右横の女の子が、ため息まじりに、つぶやきました。

「あたしも走るのきらい。おそいんだもの。ねえ、手をつないではしらない？」

左横のおともだちが、まこちゃんの頭ごしに、ささやき返します。

「なに言ってたんだよ。おまえらトクしてるんだぞ。だってまこと走るんだもん。どんなにおそくたって、ビリから二番めなんだから」

まこちゃんの後ろでしゃがんでいた男の子が、まこちゃんをこづきながら口をはさみました。

こづかれたまこちゃんはバランスをくずし、あやうく前につんのめってしまいそうになるのを、どうにか手について防ぎました。

両側の女の子二人は、互いの顔を見つめあい、次に、真ん中のまこちゃんに目をやってから、くすくす笑い出しました。

右側の子は下を向いて、左側の子は口をおさえて。

まこちゃんは大きな目をぱちぱちさせて、涙が落ちそうになるのを、こらえました。

こんな目にあうと、いつそ早く順番が来て、さっさと恥をかいて終わらせたいと願う、まこちゃんです。

「ピーッ！」

入場門の横に立っている保母さんが、笛を吹きました。
いよいよ、まこちゃんたちの番です。

しゃがんでいた年長組のみんなが、保母さんの先導でスタートラインの一米ートル手前まで行進します。

先頭グループ以外の子たちは、そこで再び、しゃがんで待ちます。

まこちゃんは背が低いほうなので、先頭グループです。

他の五人と一緒にスタートラインに着きました。

去年の運動会までは三十メートル走で、直線コースだったのですが、年長さんになると六十メートルを走ります。

グラウンドを半周しなくてはなりません。

ぐくつと緊張でこわばった表情をして、豆走者たちは白線の前でスタートの合図を待ちます。

「……ようい」

パン！

空気を切り裂くピストルの音に、一瞬ビクンと身をすくませる、まこちゃん。

おともだちのみんなは、合図とともにラインからいっせいに飛び出しています。

スタートからして、ばっちり差をつけられてしまっています。

まあ、いいや。いったん走り出しさえすれば、笑い者になるのは、あっちのゴールに着くまでだけなもの。

しんぼうしんぼう。

おだんご状態で接戦を繰り広げるおともだちから、ずつつと、ずつつと遅れて、まこちゃんはトテトテと、あくまでもマイペースを崩しません。

おだんごになったおともだちの群れが、ちょうどカーブにさしかかったときのことです。

あっ！

声を嚔らして応援に熱中していた父兄も保母さんも、子供たちも、その場にいたみんなが息をのみました。

先頭の子が、つまずいたのです。

あとに続くみんなも、足をとられて次々と、しょうぎ倒しに地面に転がりました。

ずつつと後ろにいたため、ただ一人難をのがれたまこちゃんは、さあ、どうしたでしょうか？

ふつうの子よりは、やっぱり遅いのですけれど、それまでよりもあきらかにペースをぐんぐん上げてきています。しかも、その時のまこちゃんの表情ときたら。

本当の本当に、本気です。

まこちゃんなりに、全力をつくしています。ただのフリなんかではありません。

「まあ、あのまこちゃんが！」

「はじめて一等をとれるかもしれない！」

「しつかり！ まこちゃん！」

観衆が、まこちゃんに声援をおくり始めました。ところが。

土けむりの中でもがいているおともだちのところまで行くと、なんとまこちゃんは、なんの迷いも、惜しげもなく立ち止まり、かみこんでしまったのです。

「だいじょうぶ？」

肩を上下させ、よこっ腹をおさえながら、転んだおともだちに、片手をのばしています。

全員が、あっけにとられてしまいました。

真っ先に自分を取り戻したのは、こけてしまう前までは三番目くらいを走っていたおともだちです。

「かけっこ、いやだなあ」

と、まこちゃんの右横でつぶやいていた子です。

その子は、すっと立ち上がると、ゴールをめざして残りの距離を一目散に駆けてゆきました。

すると、取り残された子たちも、ハッとして、必死であとに続きます。

あちこちすりむき、泥だらけのまま、血を流しながら。
ある子は、びっこをひきながら。

おともだちが、また元気に走り出したのを確かめると、ようやくまこちゃんも、ゴールに向かいました。

ほっとしたような笑顔を浮かべて。

マイペースで、トテトテと。

（後書き）

最後まで読んでくれて、ありがとうございました。

えと、この作品はいつだったか、高校時代の友人が就職した先に、小説の個人誌を発行してるひとがいて、なっちゃんもなにか書いてみない？ と誘われて、ひねりだした作品でした。

自分の保育園時代の思い出が下地です。

まあ、どこからが実話で、どこまでが脚色が、ということは、ご想像におまかせします、ということと。

つたない習作ですけども、当時はわりとご好評いただいて、ホッと胸をなでおろした記憶があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0615d/>

のろのろまこちゃん

2010年10月8日13時40分発行